
ミッシング・リンク 2

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッシング・リンク 2

【Nコード】

N8878C

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

新月のおまじないと満月のジンクス。『おまじない』と『ジンクス』が運命へと導いていく。記憶は忘れていたのではなく、封印されていた。全てを思い出したとき、もう戻れなくなっていた……ミッシング・リンクが明らかとなっていく

1・新月

新月の夜、風船蔓の中に蛍を入れて堤燈を作るんだ。
すると、きつと光が進むべき方向を照らしてくれるから――

丁度風船蔓が成る季節、浅葱は近くの公園へ来ていた。風が頬に当たる。優しくすり抜けて行く夜の風は、冷気を含んでいて気持ちいい。新月の夜、静まった夜の公園は昼間の面影を少しも残してはいなかった。ただ、黒く彩られた景色が広がっている。

歩いていく内に、目の前に小さな光が見えた。ふわふわと何かを求めて飛んでいる光。それは幻想的で現実味を帯びていない、不思議な物体に見えた。

光の正体は蛍だった。闇の中に浮かぶ光は神秘的に輝いている。淡く、消え入りそうな光に心を奪われた浅葱は、自然と蛍を目で追っていた。決められた道を行くのもなく、自由に漂う蛍。浅葱は沢山のモノに縛り付けられているからこそ、自由を切望していた。その戒めは、自分に原因があるものが多々あることも理解している。しかし、理解と納得は別物だった。まだ納得ができていないから、縛られ続けていた。

少しすると、蛍は一つの場合から動かなくなった。止まっている先には風船蔓が浮かび上がっていた。ほんのりと、弱い光で見えるほどの視界。辺りはそれほど暗いのか、と浅葱は初めて実感した。暗いのは恐くない。全てを隠すのなら自分も隠されているはずだから、と安心する。

浅葱はふと思い出した。何処かで聞いた話を。新月のおまじないを。

導かれるようにして、浅葱の手は蛍へと伸びて行った。蛍は捕まえられることを少しも恐れず動かない。浅葱は近くにあった風船蔓を摘み、少し穴を開けて蛍をそつと中に入れた。蛍はじつとしたま

ま、ひっそりと光っていた。一定のリズムを刻みながら、呼吸をするように、心臓が血液を送り出すように。それは生きている証拠に見えた。

ぼんやりしていた浅葱は驚きで目を見開いた。よく見ると、ある方角にだけ明かりが届いている。懐中電灯を一直線に当てたように出来た光の筋。光の道、と言っているほどしつかりしたものだ。これがあの、進むべき方向というものかもしれない、と妙な確信があった。

蛍が指し示す先には何があるのかわからない。真っ暗で吸い込まれそうな闇が続いているだけかもしれない。しかし、浅葱の足は指し示す先に向かって進んだ。本能に従っているかのように、しっかりと。

浅葱はゆつくりと歩いていった。歩き慣れた、木々に囲まれた遊歩道を蛍の光のリズムで歩いた。自然とそのリズムは浅葱の鼓動と重なっていた。珍しく、リズムが安定している。

遊歩道は、夜の闇でいつもと違う感じがした。闇に吞まれた木々は一層影を濃くする。しかし、不安は一切なかった。ここまで闇を切望したのは初めてだった。蛍が導いているという安心感が、浅葱の心を満たしている。

闇を見つめている内に、浅葱はだんだん心臓が高鳴ってくるのを感じた。だんだん、少しずつ。胸が高鳴る、というのはこういうことか、と浅葱は実感した。不安とは違う、期待の高鳴り。しかし、まだ確実に期待の鼓動かどうかかわからない。いつもの病気の為か、それとも。

蛍の光が儚く揺れる。浅葱は心を掻き立てられたように感じ、歩調を速くした。思いを消すように、速く。期待して失望するのはもう嫌だった。初めから期待などしなければ良かったと思うことが多い。「何故そんなに急いで歩いているの？」

2・蚩

突然後ろから掛かった声に、びくつと体が固まった。ゆっくり振り返ったその先にいたのは、色の白い、同じ年くらいの少年だった。白い肌が闇の中で浮かんでいる。そして、闇に溶けて薄っすらと見える黒い髪が一層肌を白く見せる。浅葱に負けない、肌の白さ。手には浅葱と同じように風船蔓を持っていた。

少年は、風船蔓を持った手を顔の前へとやった。浅葱は衝撃を受けた。信じられない、という思いが頭を占める。光で浮かび上がったその顔はよく知っている、忘れられない顔だった。少年の黒曜石の瞳が浅葱の視線を捕らえた。

「どうして・・・」

「覚えてくれていたんだ。おまじない」

につこり笑って浅葱の持っている風船蔓を指した。

浅葱は思い出した。このおまじないは少年が教えてくれたものだった。そして少年は。

「このおまじないをしているってことは、迷っているんだね？」

浅葱の考えを遮るように、少年は聞いてきた。視線を逸らして頷く浅葱を見て、ゆっくりと近づいてくる。その足取りは軽く、体の重さを感じさせなかった。まるで浮いているように見えて。

浅葱は幻覚だと思った。あつてはならない幻覚。期待が生んだモノなのだから喜んではいけない。浅葱を縛っている鎖が少年だった。縛られ続けることに意味はないと知っているのに、それなのに解こうと努力しない自分がいる。

目の前に立った少年は、自分の持っている風船蔓を浅葱に向かって差し出した。

「あげるよ、これ」

少年は、差し出された風船蔓を受け取ろうとした浅葱の手を不意に掴んだ。掴まれた手から伝わる少年の冷たい体温。体温と言えるの

だろうか。氷水に入れたように冷たい手。まるで硝子のようなだった。浅葱は振り払うのを躊躇った。儚く、壊れてしまいそうで。

「迷わないで」

真っ直ぐ見つめる少年に、視線を合わせた。黒曜石の瞳の中は深く、意思を持っていた。浅葱にはわかっていた。少年が何を言いたいかを。少年はこうなる事を望んでいたわけではない。むしろ反対に鎖になどではなく、追い風になりたいと思っているはずだ。

少年は微笑み、掴んでいる手に力を込めた。

「蛭は心の中の光。きつと一つのところを指しているから。もう本当は決まっているんだよ、何処へ行くべきかなんて。蛭は表面にそれを表しただけ。だから見つかるよ、答えは」

ゆっくり手を離し、少年は闇の中へ戻って行った。あいかわらずの重さを感じさせない足取りでゆっくりと。それ以上言う事はない。それ以上言う言葉は効力を失う。言いたいこと、伝えたいひとだけを言うから言葉は深く刻み込まれる。

浅葱は追い駆けたい衝動に駆られた。しかし足は動かなかった。少しも、微動だにしない。行くべき場所を知った今、足は忠実に守っていた。間違った方へは進まない。

少年の行き先は浅葱にはわかっていた。しかし光は逆の方向を指していた。当然の結果だった。浅葱の道は少年と同じ道へとは続かない。

「また会える？」

浅葱の声を聞いて振り返り、少年は変わらない笑顔で頷いた。浅葱はやつと理解した。安心させていたのはこの雰囲気だった。同じ場所にいるという、雰囲気。少年は闇の中へ溶けていった。

二つになった光は、同じ方角を指していた。行く先はわかっている。

答えは一つ。

浅葱は迷わず歩いた。もう迷う必要なんてない。そしていつの間にか心の中にあつた鎖が解けているのを感じた。幻覚ではなく会え

たから、そして少しも少年は怒ってはいなかったから。もう病気を引き起こしていたモノの大半は消滅していた。残るのは少しの心配だけで。

少し進んだ先の木々の間から見えた建物は白っぽいコンクリートでできていた。進むべき道はそこへ続いている。

未来はそこにある。

浅葱は一つ言えなかったことがある。言ったらきつと少年は消えてしまっていただろう。浅葱におまじないを覚えてくれたあの少年は一年前に死んでいた。もうこの世にはいないはずの少年。

浅葱には今、何もかもわかっていた。あれはきつと螢の光が見せた奇跡だろう。少年が最後に言った言葉が頭を過ぎる。

「きつとまた会えるよ…」

3・病院

浅葱はゆっくりと瞼を上げた。目の前にはいつもの白い天井が広がっていた。白くて、無機質な壁が目にも痛い。病院独特の消毒薬の匂いが鼻を掠めた。

浅葱はベッドの上にいた。いつの間に寝ていたのか、わからなかった。どこからが夢だったのか。あの夢の後だからこそ、いつもと変わらない部屋にガツカリした。重い頭に顔を顰めながら起き上がった時、手に何かを握っているのに気が付いた。

フウセンカズラ――

蛍は逃げてしまっていたが、確かにあった。しっかりと、二つの風船蔓を握っていた。

瞳から突然、涙が出てきた。嬉しくて悲しい、そんな気分が現れた為だった。それ以上に何かがある気がしたが、今はわからなかった。ぎゅっと、風船蔓の茎を持つ手に力を込めた。

現実に戻されるのはつらいけど、夢を見ているばかりではいけないから。だから人は進むしかないだろう、と教えてくれた少年。

涙は止まることなく流れ続けた。迷いを全て流してしまうように。終止符を打つように。

「後悔なんてしていない・・・だけど」

少年の声は悲痛に響いた。少年は今窓の外からでしか浅葱を見守ることができなかった。まだ時は満ちていない。浅葱が真実を知った時、どうなるかが心配だった。壊れはしないだろうが、閉じこもるかもしれない。そして、心を閉ざしたまま『実行』するだろう。せつかく今、鎖を振り切ったというのにまた新しく縛られることになる。いや、初めから繋がれていたのだ。運命という名の残酷な『

プログラムに

4・満月（前書き）

以前『ミッシング・リンク³』としていたものです。

4・満月

湖の水面に映る満月

その上に雫を落として願いを唱えるんだ

水が弾く音と共に現れるから

変わらないその瞳に夜空の満月が 美しく輝く

波紋が静まると 消えていつてしまう

だから その瞬間まで夢をみせて

気温はこの夏最高だと予報で言っていた。

日差しの強い夏、少し薄暗くなってきた中、姉と並んで家へ続く山道を歩いていた。

両手にはたくさん荷物がある。それと対照に買った本人の姉の手には鞆一つで、軽く手を振りながら前を歩いている。

「浅葱―早く帰らないと日が暮れるわよ」

少し歩くペースを速める姉に対して、僕の足は遅くなった。約五キロの荷物が手に食い込む。

避暑地へ来た理由は僕の病気のためだった。神経性の病気で入院していたが、一年で退院した。

神経性の病気とは、悩んだり、ショックを受けたりすると鼓動が速まり呼吸が苦しくなる、というものだった。まだ完治とは言えないが、状態は良くなったので、今は普通に生活をしている。

突然症状が軽くなったのに、医者も家族もただ驚くだけだった。

一年で退院するには、状態は悪すぎた。なのに、今では病気だった気配さえない。原因と結果を、言えなかった。

すぐに退院できたが、神経性のモノはすぐには治らない。そう医者は言っていた。だからこそ、そんな僕を気遣って、父親が会社が持っている別荘を借りたのだった。山の澄んだ空気は体にいいからと。それなのにこの扱いはひどい、と内心不満に思っていたが、洪

々姉の後ろをついていった。家族を心配させたことには変わりはない。

山道は涼しかった。木々は影を作り、太陽の光を遮断してくれる。青々とした葉は風を運んでくる。そんな道を肌で、耳で、眼で感じながら歩いていると、ふと、ある音が耳に入ってきた。

葉がざわめく中で聞こえる音。それは歌だった。ソプラノの声でゆっくりと歌っている。曲風は『星に願いを』に似ていて優しい感じだった。声と曲が合っていて、調和している。

「姉さん・・・何か聞こえない？」

前を歩く姉に訊いた。姉はその声に反応して立ち止まり、振り返った。暫く無言のままで神経を耳に集中していたが、姉に聞こえるのは風の音だけだった。

「えっ・・・何も聞こえないけど？」

「うそ・・・だってほら、歌が聞こえる」

「私には葉が擦れ合っている音しか聞こえないわよ」

そう言って、数十メートル先に見える別荘に向かって走って行ってしまった。全くもって荷物を持つのを手伝おうという気はないようだ。僕が病気だからといって気を使わない姉だからこそ、笑っていられた。気まずい雰囲気はストレスになる。

姉に置いて行かれたまま立ち止まり、まだ聞こえる歌をじっと聴いた。後半に差し掛かった歌。

どこから聞こえるのか。

耳をすませて聴いていると、森の中から聴こえているようだ。森はもう暗くなっていた。それは、一度見たことがあるような風景に見えた。

ふと背中に気配を感じ、振り向いた。

その先には黒髪の、あの少年がいた。

「睦月・・・」

呟いた声に反応するかのように微笑んで、睦月は歌い続けた。しばらくの間聴いていると、睦月は途中で歌うのを止めた。ちょうど

サビに入る手前だった。

それがわかったのは知っていたからだった。思い出せないが昔に聞いた歌。睦月の声は前に聞いたものと同じ、優しい声だった。

「浅葱・・・今夜湖で」

そう言った後、森の奥へ軽い足取りで走って行った。前と変わらない、浮いたような足取り。真実がはつきりと表されていた。

睦月は死んでいる。

その後ろ姿を見て、思い出した。病院の近くの公園で会った、あの時。重なる景色はあの場所だった。まだ縛られてる、と感じる。

そして「また会える」という、あの言葉が甦った。

5・湖

夜も更けて、辺りは静まり返っていた。

月明かりに照らされた木々は、ほのかに光っているようで美しい。夜の森は不思議と恐いとは思わず、安心させるような雰囲気を持っていた。

自然と足の進むまま、森へと入っていった。

風で揺れる葉は擦れ合い、音となって何かの曲を奏でているように聞こえる。それは、あの歌のように聞こえてきた。

葉の曲に耳を傾けながら、森の奥へと進んで行った。

「浅葱」

突然開けた木々の真ん中に湖があった。そして淵には人影が見える。逆光で顔は見えなかったが、誰なのかわかった。

「睦月……」

近づいていくにつれ、顔がはっきりと見えてきた。あの、忘れられない顔。忘れたくても忘れられない。

睦月は湖に視線を戻して、葉から落ちる夜露でできる波紋を見た。睦月の隣に立ち、同じように波紋を見た。

「覚えてる？ 僕が歌っていた歌」

睦月は視線を湖に落としたまま波紋の中に映る僕に話し掛けた。

「あの『湖の水面に――』っていう歌？」

「そう。あれもジンクスの一つだったんだよ。知ってた？」

睦月はにつこり笑って僕の顔を見た。その顔に悪意は感じられず、溜め息をついた。

「……知らなかった。ああ、だから『また会える』ね」

「まあね」

そう答えるなり、すっと立ち上がった睦月は湖へと足を踏み出した。それを止めようと手を延ばしかけたが、次の光景を見て少し胸が痛んだ。同時に呼吸も少し荒くなった。

水の上に立っている睦月。それはこの世にはいない存在の証拠だった。

「なんでそういうことするかなあ」

「仕返し。怒っているんだからね、病気になったこと」

言葉とは反対に、睦月の声は優しくかった。そして変わらない微笑みが浮かんでいる。しかしそれは月光に照らされて、消えてしまいそうだった。闇に溶けてしまうように、曖昧に映る。

「そんなの・・・仕方がないじゃない。だって睦月は僕の」

「人の心はコップ一杯の水のようだね」

言葉を遮った睦月はそのまま続けた。

「こぼれるように壊れてしまったり、濁って悪くなってしまうたり」「僕のコップの水はこぼれしまったということ？」

真っ直ぐ見据えた視線の先には安心させる睦月の笑顔があった。

睦月は視線を逸らし、葉の残りの夜露を見た。確かめるように、じつと凝視している。

その視線を追うと、また胸が痛んだ。

あと何分かで雫は落ちきってしまう。

あの歌では、落ちきってしまったとき。

「こぼれた水は戻らない」

一つ、雫が落ちた。睦月は無表情で、しかし口調ははっきりしていた。

広がる波紋は薄くなっていく。そして、消えた。

「でも・・・また入れることはできるよね。他の水を」

雫から視線を睦月に向け、はっとした。

その言葉の優しさと、だんだん消えていく睦月。それは一つのことと示していた。

「浅葱、気付いているはずだよ。一度はこぼれた水だけど、今、浅葱の心のコップには水が入っているんだよ。ねえ、誰が分けてくれた？」

また雫が落ちた。その度に薄くなっていく睦月。しかしその顔に

はあいかわらず微笑があつた。

ゆつくりと、そしてはつきりと言つた。

「父さん、母さん、姉さん・・・あと御影^{みかげ}」

「うん、だからね、悩まなくていいんだよ。僕はもう生きてはいないけど、そばにいるから。皆、助けてくれるから。だから、今度はその水を守ろうよ」

ゆつくりと、一歩ずつ近寄ってくる。そして雫が落ちきつた時、消えた。目の前で、跡形もなく。

睦月のいた場所を見つめたまま、そつと呟いた。

「兄さん・・・・・・・・・・」

6・花

葉の間から漏れてくる光で目が覚めた。あのまま眠ってしまっていたようだ。

昨夜のことを思い出しながら、起き上がった。

確かあの辺にいたような。

記憶を探りながら、睦月の立っていた場所を見た。

その場所には花が二本、浮いていた。それは偶然か必然か、近くまで流れてきた。

その花を取り、家へと続く道を歩いた。その道は昨日、姉と歩いた道だった。

帰る途中、心配して探しに来たのか、不安な表情をした姉と会った。

「浅葱、何してんの？」

僕を見つけてほっと息を吐いた姉は苦笑を浮かべた。小走りですべてきた姉は、手に持っている花を見て不思議そうな顔をした。

「向日葵とかたばみ？　どうしたの、コレ」

「もらっただよ」

「誰に？　恋人？」

「なんで恋人・・・？」

俯いて真剣に考えている姉に、少し脱力しながらも聞いてみた。

それを無視し、まだ考え続けていた姉は、しばらくして顔を上げた。

「それとも・・・まあいいわ。向日葵は『あなたを見つめる』で、

かたばみは『私はあなたと共に生きる』っていう花言葉があるのよ」
背中を軽く叩いて家に帰ろうと促した姉に、走って隣へ並んだ。

その顔には自然と笑顔が浮かんでいた。

確かに恋人にあげるような花かも。

「何？　どうしたの」

その笑顔が移ったのか、姉も微笑を浮かべて聞いた。にっこりと

満面の笑顔を作った。

「秘密だよ」

睦月に遮られた言葉をそっと、姉に聞こえないように呟いた。

『だって睦月は僕の兄さんなんだから』

「やらなければならないんだ」

自分に言い聞かせるように、花を握り締めた。

覚醒してしまったのだから、やるべきことは決まっている。睦月だってそれを望んでいるはずだ。そして、あの人も。自分だって同意したのに、でもそれを行う事が今では良いとは思えなかった。しかし、全てを握るのはあの人だから。もう始まっているのだから止められはしない。ただ、やるべきことをするだけだ。

プログラムは絶対的なモノだから。

7・昼の月

冷えた感情を溶かすための方法の一つ

凍りついた心を元に戻すには

宝石を氷と反応させて

空気の中に溶かすんだ

そうすれば 自然に水に還り

自分の心を許す事ができるから

冷たい風が頬を刺す、十二月。

寒さのためか、人通りの少ないこの季節に一人、あてもなく歩いていた。冷たいアスファルトの上を歩くと靴から冷たさが伝わってくるようで、少し歩調を速める。顔を撫でる風に思わず身震いをした。

気温は零度に近い。重い雲が空を覆っていて息苦しい感じがするのは錯覚ではないだろう。しかし、この季節は嫌いではなかった。息をする度外気の冷たさに触れ、少し気持ち良く感じた。溜まって濁っているモノが薄れていく感触がする。

「雪、降るかな？」

突然、後ろから声がしたのに立ち止まった。小さい子特有の高い声。しかし、自分に掛けられた声ではないと思い、歩き始めた。小さい子供に知り合いはいない。そして無愛想な自分に声をかける子供なんていない、と長年の経験からわかっていた。

無視して歩いていると、ぐっと後ろに力が掛かった。コートを引っ張られている感触がする。少し力を入れれば手は離れるだろうが、あえてそうしなかった。仕方なく振り返ったその先にいたのは五歳くらいの男の子だった。

「ねー降るかなー？」

上目使いで首をかしげて聞いてくる仕種は可愛かったが、手はし

っかりとコートを掴んでいる。可愛さ余ってとはこういうことをいうのだろう。

手を振り払うのを諦め脱力して、溜め息混じりに答えた。

「さあ、降るんじゃないのか？　これだけ雲があつたらさ」

冷たく言い放ったのに、男の子は動じずにわくわくした顔だった。

「本当？　やったー」

満面の笑顔を浮かべた男の子。その顔に、脳裏で何かが浮かんでこよよとする。この顔はどこかで見たことがあった。そう、遠くない昔に。

どこで。

それを思い出そうとしてじっと見つめた。鮮明になっていく記憶。押し込められた記憶の箱が、今開こうとしている。すると突然男の子は表情を硬くし、澄んだ声で言った。

「ねえ、なんでそんなに淋しそうな顔をしているの？」

突然の言葉に身を固めた。男の子は目線を上げ、じっと瞳を覗いてくる。その瞳を見ていられなくて、思わず逸らしてしまった。見たことがある、瞳。近くにあった、存在。しかし思い出そうすると目の前の存在が打ち消す。堂々巡りの思考に頭が痛くなりそうだった。

「・・・淋しそう？」

「そう。なんで？」

視線をアスファルトに落としたまま、少し考えた。そんなことを言われたのは今まで一度しかなかった。それも同じような瞳で。その答えは未だに出せてはいなかった。

淋しそう。どこが。

「淋しくなんかないけど」

その答えに男の子は困ったような顔をした。目はなぜわからないの？と言っているように見え、少なからず動揺してしまった。答えを出すのが辛いなんてことは、初めてだった。学校で教えられることは全て模範解答がある。数学に至っては答えは一つだ。自分の感

情を表すのなんて十文字もあれば十分だった。しかし、今求められているのはもつと次元が違うことだった。深層心理を知るなんて力ウンセラーでも難しいのに、素人がすぐに答えを出せるはずもなかった。

男の子は暫く考えている風で沈黙が続いた。俯いていたが、相変わらず手はコートを掴んだままだった。じつと待った。今ここで立ち去ってはいけない、と本能に近い何か働く。そして男の子は唐突に顔を上げた。変わらない真っ直ぐな瞳を向けて。

「じゃあ、お兄ちゃんはいつからお兄ちゃんでなくなったの？」

俺が俺でなくなったのはいつか。

自分でなくなったとはどういうことだろう。昔とは違う自分になっってしまったということだろうか、考えてみる。いつの間にか真剣になっている自分を笑った。この感じは近い場所にあったモノだった。明らかになっていく、頭に引つ掛かっているコト。

昔とは違う自分。そうだとしても『自分でなくなつて』はいない。「俺が俺である限り、俺は俺でしかないだろ？ 別に他になろうとは思わないし、思ったこともない」

「うん・・・だけどね、見かけとかじゃなくて中の方は？ 僕が言つたのは中の方。お兄ちゃんの心は淋しそうで冷たい。お兄ちゃんでなくなつて」

向けられる瞳からは心が見透かされている感じがする。

澄んだ瞳。濁りが無く、汚れていない瞳。世の中に染まっていない色。子供だから、というわけではない。それを持つことができるのは限られた人間だけだ。そして、今まで二人だけそういう人間に会ったことがある。性質が同じ二人に。

何故か怒りが込み上げてきて、責めたくなつた。懂れていたモノを持つている子供。しかし、口から出た声は弱々しく、消えてしまひそうだった。責める権利なんて誰も持っていない。

「大人になっていくつてそういうことだろ？・・・感情を押し殺して、一人になつていく。子供の純粹さを無くして汚れていく・・・」

仕方のないことだ」

「変わっていくのは悪い事じゃないよ。だけど・・・自分で変わったものじゃないと意味が無いよ。ただ、世の中に流されていくだけじゃだめなんだよ」

男の子はコートから手を離し、力無く落としている俺の手を取った。その手は温かく、体に染みていった。脳裏には鮮明になつていく、形を成していなかったモノ。この温度が呼び覚ます、記憶。

いつからだろう・・・温かさを忘れていたのは。

「これ、あげる」

につこりと笑って手を離した。離れた手の中に残っていたのは小さな水晶玉で。大きさはだいたい飴玉くらいだろう。

透明な宝石は、手の中でひっそりと光っていた。

「水晶には浄化作用があるんだって。悪いところを全部取ってくれる。だからきつと溶けるよ、心の氷」

笑みを浮かべた男の子は、心なしか前より大きくなっているようだった。そう、小学生くらいに。

それが錯覚なのかどうかを確かめるように、水晶玉を覗き込んだ。水晶玉には何も映っていないくて、浄化作用というのがなんとなくわかった。澄みきっていて、心を癒す。

暫く瞳を閉じていると、ふと、手に何かが触れた気がした。ゆっくりと目を開けたが、すでに無くなってしまっていた。冷たい感触だけが残る。

雪だ。ゆつくりと、一つ一つ結晶となつて降ってくる。

「あつ雪だ」

男の子の声で顔を上げた。そして、息が詰まった。

8・水晶

目の前にいたのは男の子ではなく、同い年くらいの少年、親友の「睦月?！」

思わずその名が口から出た。そう、彼は睦月だ。漆黒の髪で、色の白い・・・あの男の子は睦月だった。

しかし、なぜ。彼は一年前に死んだ筈だ。

「睦月・・・なんで」

「御影が苦しんでいるから。大人になろうとして間違った方向に行こうとしているから。汚れるだけが大人じゃないんだよ?なぜ感情を隠そうとするの? 人はいつだって自分に正直じゃないと駄目なんだよ、壊れてしまうから」

相変わらず優しい声で話す睦月に、少しホッとした。

変わらない睦月。死んでいてもいい。ただ、今会えたことが嬉しかった。自分でもわかるくらい、心が穏やかになった。引っ掛かっていたモノが解け、透明になっていく。

「ああ、わかつている。いや、わかつていた、だな。少し自暴自棄になってただけだ」

「やっと笑った。忘れていたのかと思った、笑い方」

その言葉で初めて気付いた。

俺は今、笑っている。

何年ぶりだろう、笑ったのは。多分、一年ぶりだ。睦月の笑いが移ったのか、表情は戻せなかった。いつもの無表情には。

「御影、自分を許さなきゃ駄目だよ。大人になるってそういうことだと思うよ。汚さの中で、自分を守る力をつけなきゃ。それまで僕はいるから」

優しく降る雪の中に溶ける言葉。それはきつと本当だ。きつといてくれる。実体は無くても同じ世界にいるならそれでいい。一人でなければ強くなれる。それに睦月の半身とも言える浅葱がいる。睦

月と同じ性質を持った浅葱。睦月と二人で守ろうと誓った存在。浅葱の未来は明るくないから、一番辛いのは浅葱の役だからと。

心に約束は残った。

「守る力なんてすぐつくさ」

「うん、そうだね。そういうところが御影だよ」

「そうさ・・・心配してくれてありがとう」

こんなにも素直に言葉が出てくるとは正直思わなかった。最後の方は呟きだったが、睦月に聞こえていたようだった。自分が言った言葉に驚いているのに対し、睦月は微笑を返しただけだった。おおよそ、「御影は元から素直なんだよ」とでも思っているのだろう。だからこそ、睦月は親友なのだ。今までも、これからも。

「じゃあね、御影」

「うん・・・じゃあ」

まるで学校の帰りの別れのような挨拶だった。また明日会えるよ、うな、そんな感じのする挨拶。最後にお互いに手を出して握手を交わした。睦月の手は冷たかったが、温かさが体を包んだ。内面的な温かさが。

雪はまだ降っていた。その中で睦月はゆっくりと消えていった。例えるなら、氷が水に還るように。

手の中では水晶が淡く、輝いていた。

「もう始まっているのか・・・それともまだ準備期間、いや猶予期間なのか？」

一枚の名刺に似た銀色のカードをポケットから取り出した。先程まで何も入ってなかったはずのポケットから出てきたことに少しも驚かなかった。ただ納得するだけで。カード一枚で終わってしまうプログラム。作動させるのは俺だが、実行する意思はあの人のものだ。全員で決めたはずなのに、あの時は同意したのに今では反対す

る気持ちが強い。それは自分だけだとは思わなかった。皆が、あの人が反対したらいつでも止めることができる準備をしようと思った。

プログラムはカード一つで変わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8878c/>

ミッシング・リンク 2

2010年10月8日15時56分発行